

木質バイオマスエネルギーを利用したモデル地域づくり推進事業シンポジウム

「木質バイオマスを地域づくりに活かすためには」

2017年2月27日
東京大学弥生講堂

森と里の研究所
田内裕之

<http://mori-sato.com>

木質エネルギーを地域づくりに活かすためのポイント

1. 地域というスケール(規模)をきちんと定義する。
2. 地域での、生産・加工・利用までの需給規模をきちんと見積もる。
3. 地域社会の発展に寄与するかをきちんと考える。

そのためには、
地域資源の把握、地域の人たちとの
合意形成・協働、地域の自立が重要。

1. スケール(規模)をきちんと定義する。

- a. 生産場所(森林)から利用場所(施設・集落)までを含む地域
 - その中には、エネルギーの供給者から利用者まですべてが存在する。
 - 地域内で、エネルギーのみならず、雇用や経済が循環系となる(地域の理解が得やすい)。
- b. 生産と利用場所とが離れている地域
 - 生産側地域(いわゆる川上)と利用側地域(川下)との関係性を理解しておく(両者を含めた合意形成)。
 - 特に川上(農山村地域)にとって、どれだけのメリットがあるのか(地域間格差が解消されない傾向)。

a.の場合、生産者が利用者でも有る規模、つまり一集落から小さな市町村が一地域となる。b.の場合、生産もしくは利用者は他者に直接的に関わることがない、複数の市町村や大流域が一地域。地域づくりを考えるなら、地域の単位は a.になるのでは？

2. 需給規模をきちんと見積もる。

- a. 利用
 - 施設の数、規模
- b. 加工
 - 利用形態とのマッチング(燃料のタイプ・質)
- c. 生産
 - バイオマス(原料)の供給量は、収穫可能量(伐採のための組織・インフラに依存)で、潜在量(資源の現存量)で見積もってはいけない。
 - 現状では燃料資源は、あくまでも林業活動に付随して出てくるもので、その量には限界があり、コストは輸送費(距離に比例)によって決まることを理解しておく。

ここでは、生産側に視点を絞っています。

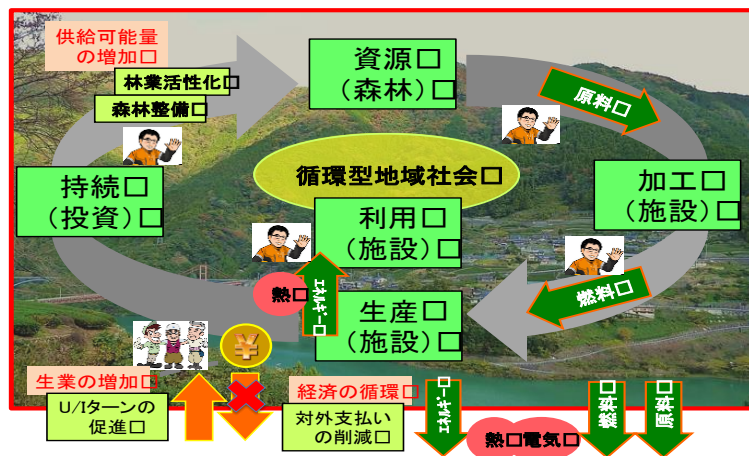
地域内循環を目指すのなら、現状の収穫可能量で見積もるべき。期待値で見積もって、供給出来なかった場合が多い。生産サイドには、多くの住民(所有者)、既存組合・事業体が存在するので、規模拡大が早急には出来ないことを織り込んでおく。

3. 地域づくりになるかをきちんと考える。

- a. 経済性の確保
 - ・直接的な貢献は？ → 雇用や金がどれだけ地域に回るか。
- b. 地域社会の充足
 - ・地域住民に認知されるか？ → やる気・誇りを引き起こす。
- c. 自律と自立
 - ・地域で回していけるか？ → 技術や人を創り出す。

地域づくりとは、地域の人達が自発的に自立を目指していく事である。地域の持つ人材や技術のできるシステムが第一歩。それによって、地域住民が直接的(カネや雇用)な受益者となってくると、地域の誇りややる気が伴ってくる。地域外からアプローチする人や組織は、これを念頭に、地域内の団体等と協働できるかがポイントとなる。

地域(集落~町村単位)づくりとエネルギー



地域内(図の赤枠)でエネルギーの生産から利用までが出来れば、エネルギーに対する対外支払いが削減され、雇用の拡大と定住者の増加に繋がり、利益を持続的に供給可能な森林の整備に投資することが出来る。資源・経済が循環する地域社会づくりの一助となる。また、地域外への供給により、地域への経済還流も可能になってくる。